

# 狐のつかい

新美南吉

青空文庫



山のなかに、猿さるや鹿しかやおおかおきつつねねなどがいつしよにすんでおりました。

みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんでありました。

夜がくると、みんなはこのあんどんに灯ひをともしたのでありま  
した。

あるひの夕方、みんなはあんどんの油あぶらがもうなくなっているこ  
とに気がつきました。

そこでだれかが、村の油屋あぶらやまで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったものでしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。村にはみんなのきらいなりようし獵師と犬がいたからであります。

「それではわたしがいきましよう」

とそのときいったものがありました。きつね狐です。きつね狐は人間の子どもにばけることができたからであります。

そこで、きつね狐のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さてきつね狐は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりながら、村へゆきました。そして、しゅびよあぶらく油を一合ごうかいました。

かえりにきつね狐が、月夜のなたねばたけのなかを歩いていきますと、

たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」

といって、きつね狐はペロりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。

きつね狐はしばらくすると、またがまんができなくなりました。

「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌はした大きくない。」  
といって、またペロリとなめました。

しばらくしてまたペロリ。

きつね狐の舌は小さいので、ペロリとなめてもわずかなことです。し

かし、ペロリペロリがなんどもかさなれば、一合の油もごうあぶらなくなっ

てしまいます。

こうして、山につくまでに、狐は油をすつかりなめてしまい、もってかえつたのは、からのとくりだけでした。

待っていた鹿しかや猿さるや狼おおかみは、からのとくりをみてためいきをつきました。これでは、こんやはあんどんがともりません。みんなは、がっかりして思いました、

「きてきて。狐きつねをつかいにやるのじゃなかった。」  
と。





# 青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 狐のつかい

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>